

非公式 L^AT_EX テンプレートによる

令和 5 年度電気・電子・情報関係学会東海支部連合大会原稿の書き方

名城 太郎^{†*}, 名城 次郎[†], 名古屋 花子[‡], 鈴木 秀和[†] ([†]名城大学, [‡]〇〇大学)

How to Write a Manuscript for the 2023 Tokai-Section Joint Conference on Electrical, Electronics, Information and Related Engineering
Using Unofficial L^AT_EX Template

Taro Meijo[†], Jiro Meijo[†], Hanako Nagoya[‡], Hidekazu Suzuki[†] ([†]Meijo University, [‡]〇〇 University)

1. はじめに

毎年 8 月下旬から 9 月上旬に開催される電気・電子・情報関係学会東海支部連合大会は、原稿のテンプレートが Microsoft Word しか公開されていない。そこで、令和 5 年度大会のフォーマットをもとに、非公式 L^AT_EX テンプレートを作成した。本稿では本テンプレートの使い方を解説する。

2. ソースファイルの構成

<2・1> プリアンブル

- `\title`, `\etitle`: 和文表題, 英文表題
- `\author`, `\eauthor`: 和文著者名・所属, 英文著者名・所属
和文著者名の姓と名の間に全角スペースを入力し、講演者の名前の後ろに`\PRESENTER`を記載する。英文著者名の姓と名の間は半角スペースを入力する。著者名と所属の間には括弧の前に記載されている“”の記号は、半角空白を挿入するためのものであるため、削除しないこと。なお、所属が複数の場合は`\DAG`, `\DDAG`を用いて各著者の所属を区別すること。

<2・2> **タイトルの表示** `\maketitle`によりタイトル(題目, 著者, 所属)が出力されるため、消さないように。

<2・3> **本文** 東海支部連合大会の原稿は A4 で標準 1 ページ, かつファイルサイズは 3MB 以下である必要がある。なお, 2023 年度からの変更点として, ファイルサイズが 3MB 以下であれば 2 ページ以上の原稿も投稿可能になった。

<2・4> **箇条書き** 番号無し箇条書きは, 下記のように出力される。

- 項目 1
- 項目 2
- 項目 3

番号付き箇条書きは, 括弧付きで表示されるようにスタイルファイルで設定している。

- (1) 項目 1
- (2) 項目 2
- (3) 項目 3

<2・5> **図** Fig. 1 や Fig. 2 のように, PDF 形式や PNG 形式の図形ファイルを取り込むことができる。キャプションは英文で記載する。

<2・6> **表** 本テンプレートでは, 情報処理学会論文誌の書き方に準拠して, Table 1 のように罫線を少なくして仕上がりを見やすくしている。図と同じく, キャプションは英文で記載する。下記の点に気をつけて表を作成すること。

- 表の最上部の罫線は`\hline`として二重線とする。
- 表の最下部は一重線とする。

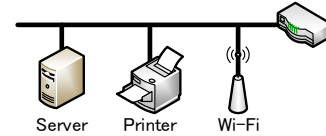


Fig. 1 Network configuration



Fig. 2 This is a tiger

Table 1 Table style based on Journal of Information Processing

	ヘッダ 1	ヘッダ 2	ヘッダ 3
項目 1	データ 11	データ 12	データ 13
項目 2	データ 22	データ 22	データ 22

- その他の罫線は見出しとデータの境界などに限定する。

<2・7> **図表の参照と配置** 本文から図表を参照する場合は, 下記に示す独自のマクロを利用する。これらは情報処理学会論文誌の L^AT_EX テンプレートで使われるマクロと同じである。

- `\figref{x}`: `\label{x}`を設定した図の参照
- `\tabref{y}`: `\label{y}`を設定した表の参照

図および表は段落の途中で掲載するのではなく, ページ上部か下部のどちらかに寄せて配置する。すなわち, `\begin{figure}[z]` および `\begin{table}[z]` の `z` の部分には, “t” (上部) または “b” (下部) のいずれかとする。

<2・8> **参考文献** 参考文献は最後の `thebibliography` 環境に記載する。文献情報は`\bibitem{label}`の後に, 著者名, 掲載誌名, 巻, 号, ページ, 発行年などを入力する。書き方の一例として論文誌 [1], 国際会議 [2], RFC [3] を示す。

3. まとめ

本稿は非公式 L^AT_EX テンプレートに基づいて作成されている。本稿のソースファイルをコピーして必要な箇所を修正すれば, 公式テンプレートのフォーマットにほぼ準拠した原稿 PDF を作成できるため, 是非利用してほしい。

謝辞 謝辞を記載する必要がある場合は, ここに記載する。不要であれば`\subsection*{謝辞}`ごとく削除する。

文 献

- [1] 松岡. 他: 情報処理学会論文誌 Vol. 63, No. 1, pp. 130–142, 2022.
- [2] H. Suzuki, et al.: Proc. ACM MobiCom 2013, pp. 171–174, 2013.
- [3] C. Perkins: RFC 5944, IETF, 2010.